

「碍」の字表記問題再考 (20) 仏教にみる障害者像

仏教の開祖は釈尊（釈迦牟尼世尊の略・紀元前 560～480）である。釈尊は北インドのカピラバストゥに生まれ、クシャトリアの身分に属する釈迦族の王子である。クシャトリアとは、古代インドのバラモン教社会における身分制度（ヴァルナ）で、その 2 番目の階層を意味する。最上位が神聖視される司祭者などのバラモン、2 位が王族、武人などのクシャトリアである。釈尊は栄華で豊かな環境の中に身を置き、育っている。しかし、出生直後に母を失い、内面的に孤独な青年時代を送っている。生きることの意味は何か、老いること、病になること、死とは何かという「生老病死」について深く悩み、29 歳の時に妻や子、家族に別れを告げ、地位も名誉も財産も捨てて孤独な求道の旅に出ている。6 年にわたるバラモン教の出家者としての苦行生活に身を置くものの、満足する悟りを得ることはできなかった。絶望的な心にさいなまれる中、35 歳の時に釈尊は菩提樹の下で悟りを開いている。それ以降釈尊は新たな修行者としての道を歩み、それが仏教の源流となっている。

釈尊の死後、東インド地域に仏教は伝播し、原始仏教時代（前 525～前 380 頃）を迎える。その後各地の異なる生活習慣や戒律に対する解釈の相違から仏教は分派していき、紀元前 100 年頃には上座部（南伝仏教）12 派、大衆部（上座部に異議を持つ革新仏教）8 派、小乗（自己の解脱を主とする仏教）20 派に分派している。

「仏陀（覚者）」になるための教えである仏教には多くの宗派が存在し、それぞれの經典に基づき教えを説いている。

勝鬘經

摂政としての厩戸王が残した業績の一つは『三経義疏』の注釈書を撰述したことである。義疏とは經典の意義、内容を解説したものであり、厩戸王は 611 年（推古天皇 19）に『勝鬘經義疏』1 卷、613 年に『維摩經義疏』3 卷、615 年に『法華經義疏』4 卷の 3 經典の注釈書を著している。

『勝鬘經』は、正式には『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』と言い、全 1 卷の經典である。悟りを求める多くの人々を救う仏教の經典として論理的、哲学的に書かれており『法華經』とならぶ重要な經典と言われている。この經典の成立は紀元前 3～4 世紀頃と推定される。内容は、古代インドのコーサラ国王の娘で在家の信者であった勝鬘夫人が仏教について説いたものである。仏陀と成ることのできる唯一の教えであることを説き、釈尊に認められたという經典である。

この經典は、インドから中国に伝わり、インド出身の中国の訳経僧である曇無讖によって 5 世紀頃に漢訳されている。その後、劉宋時代にインド出身の訳経僧である求那跋陀羅、8 世紀頃に訳経僧の菩提流支が『大宝積経』の中で『勝鬘夫人会』と題して漢訳している。厩戸王が著わした『勝鬘經義疏』は、求那跋陀羅が訳した『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』を解説したものである。内容は、序説・正説（本論）・流通説に分かれている。序説に記された内容を少し確認したい。

夫勝鬘者。本是不可思議。何知如來分身或是法雲大士。但

遠照踰閻之機宜。以女質爲化。所以初則生於舍衛國王盡孝養之道。中則爲阿踰闍友稱夫人顯三從之禮。終則影嚮釋迦共弘摩訶衍之道。論其所演則以十四爲體。談其大意非近是遠爲宗。所以如來每說讚同諸佛。發言則

爲述成。勝鬘者。世以七寶嚴其肉身。而今以萬行嚴其法身。故云勝鬘。師子吼者。自宣大理無所怖畏。義同師子不畏衆狩。故云師子吼。勝鬘就當體得名。師子舉譬爲稱。一乘大方便方廣者。舉其所說之法。

（下線は筆者が強調）
（簡約）
波斯匿王と末利夫人が、大乘の教えを信ずるようになってからのある日のこと。この教えを、友称王の許へ嫁いだ娘の勝鬘に報らせて、入信を勧めようと思ひ立ち、二人相談の上でこまごまと手紙を書いて使者に託した。父母の手紙を見た勝鬘は、それによって直接仏のみ声を聞く思いがした。静かに仏を念ずると、仏は空中に姿を現し給い、全身からは浄らかな光明が光り輝いていた。義疏にはこれを感じの仏であり、これこそは聖体円備の真実者であるとし、その光明こそは一乗永遠の理を現わしたものであると解している。勝鬘が、この仏に帰依のまことを捧げる。

この序説のなかで、經典の成り立ちと真髓が綴られている。下線部で示した「三從之禮」は江戸時代に貝原益軒が『和俗童子訓』の「女子二教ユル法」で説いた「女子教育」の言葉と重なるものである。「家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫死して後は子に従うこと。」という意味である。この言葉の出典は四書五經の一つである『礼記』とされ、女性に対する封建的、隷従的道德思想を表した言葉である。この「三從之禮」が『勝鬘經』のなかで記されているが、教えにおいては男女の貴賤、差別はないことを説いている。

2 つ目の下線の言葉「一乘大方便方廣者」は、生きとしいける人間はすべてみな仏陀になることが可能であり、成仏できることを意味している。勝鬘夫人自身が在家の立場であり、出家修行者ではない。それも当時のインドでは女性に対する差別が強くあるなかで、在家の女性が「一乘大方便方廣者」を篤く説いているのである。出家者だけが救われるのではなく、在家者であっても仏教の教えを実践するならば、すべての人は救われることを勝鬘夫人は説き、釈尊はこれを賞賛したといわれている。

この『勝鬘經』の中に示された障害の表記、文言については、次回で検証したい。

[引用・参考文献]

- 梅原猛『地獄の思想・日本精神の一系譜』中公新書、1967 年。
四天王寺勤学院『現代語訳・勝鬘經義疏』四天王寺事務局、1976 年。
高取正男ほか『古代日本と仏教の伝来』雄山閣出版、1981 年。
梶村昇『日本人の信仰・民族の〈三つ子の魂〉』中央新書、1988 年。
中村元『広説佛教語大辞典』東京書籍、2001 年。
中村元『現代語訳大乘仏典 3「維摩経」「勝鬘經」』東京書籍、2003 年。